あゆみ通信

VOL116
あゆみの会（真宗大谷派大阪教区同朋の会推進員連絡協議会）発行
会　長　浪花　博
広　報　本持　喜康

心得たと思うは　心得ぬなり

大事な自分のモノサシ

和田　稠先生

蓮如様の「心得たと思うは、心得ぬなり」と言うお言葉があります。「わしはわかった」という「わし」というものが付く限り、何もわかっていない。真実というものを自分のモノサシに合わせて理解しただけや。

どうでしょうなあ、「真宗」「真宗」と言うとるけれど、実は自分の持っておるモノサシを言うとるんです。そしてそのモノサシにあうと、「今日はええお話やった」モノサシに合わんと「何もありがとうなかった」

そうすると、初めから「聞く」ということがないのやね。自分の今日まで作り上げてきたモノサシをしっかり握りしめて、それが壊れたら大変やと。

するといつの間にか、親鸞聖人のお言葉よりも自分のモノサシの方が大事になってくるのです。それじゃあちょっと具合が悪いから、今度は無理して親鸞聖人が私のモノサシを守って居って下ると。親鸞聖人まで守り神にしてしまう。そういうことになりませんか。そういう宗教だったらまったく魅力が無いでしょう。

（和田稠［しげし］「広島・非核非戦の集いでの法話から）

第2組聞法会案内

日時　2018年８月25日［土）
午後２時
～４時
会場　光照寺
（天王寺区上汐）
内容
お勤め、法話
講師
稲垣　直来先生
（17組　徳因寺）

稲垣先生は、第2組第3期推進員養成講座の教区スタッフとしてご参加下さった、教区若手のリーダーである。

朋友会と合同研修会予告

9/27（木）
午後１時30分から
即應寺で。
講師は、池田英二郎先生
（宗恩寺）

池田住職には、2015年の門徒会との合同研修にも。

如是我聞

8月になると、思い出すことがある。母が亡くなってから叔母に聞いた話である。

戦時中、母は滋賀県の父の親戚方に、幼少の僕と弟を連れて疎開した。そこで弟は赤痢にかかり、治療も満足に出来ないまま亡くなった。終戦の1か月前である。当時、田舎は土葬で、母は大阪へ連れ帰ることに。ねんねこに弟を背負って電車に乗った。隣あったお客が弟を見て「可愛いねえ！よく眠ってる」と母に声をかけたという。その時の母の気持ちを思うと、何とも言えない気がする。弟は釈誓英。また、終戦直前に妹が生まれているが、今でいう難病で1年余のわずかの間に亡くなっている。釈尼妙恵。

戦後、父や母と高校生直前まで、京都の大谷祖廟や大阪の四天王寺によく連れて行かれた。

しかし、私が成人するまで、否、成人してからも父や母から一切、妹や弟の話は無かった。気付くことなく愚かな私であった。一人っ子のように感じながら育てられてきたのである。そんな私は、今にして思えば自分のことに一生懸命で、親に心配ばかりかけて来たのである。

ある時に過去帳の名前を見て、高槻に住んでいた叔母に聞いて初めて知った。

戦争は、人間を不幸にする。基本的人権も平和も何もかも踏みにじってしまう。戦地に行った兵隊さんだけではない。少なくとも宗祖親鸞聖人の教えを引き継ぐ私たちは、いのちを粗末にする戦争は、容認できない。初めて書いた母のこと。（本）

あゆみの会公開講座報告

2018年６月26日（火）午後1時30分から、天王寺区の了安寺（海老海恵幸住職）を会場に、あゆみの会例会を公開講座として開催、組内の住職・寺族と門徒・推進員21名が参加した。

事務局の進行で開会、真宗宗歌斉唱し、浪花博会長（法山寺）の開会挨拶。続いて海老海組長から、大阪北部地震災害の被害状況が紹介された。

講座の講師は第4期第2組推進員養成講座の講師を務めていただいた三好泰紹先生（22組蓮正寺）から、寺田寅彦（物理学者）の「天災は忘れた頃にやってくる」と言う言葉や親鸞聖人の御生涯から、師の法然上人に遇われて「雑行を棄てて本願に帰す」（「教行信証」化身土巻）について丁寧にお話をいただいた。休憩後は吉田雄彦副会長（法山寺）の司会で座談。

三好先生のお話を受けての感想や日頃の仏法に感じていることを話し合い時間を終え、恩徳讃を斉唱して終わった。

三好先生法話の一部

（前略）生きとし生きる全てのものが救われていく道を親鸞聖人は求めておられた。それは「雑行を棄てて」ということ。端的に言えば常識。私たちが持っている意識を棄てる。「棄てる」は持っているものではなくて自分の中から出てくるもの。私が生きている限り次々に出てくる。これをずっと棄て続ける。私たちは「棄て続ける」歩みだと、親鸞聖人から学ばせていただいた。何を棄て続けるのか。私たちの持っている常識を棄て続ける。仏法を聞いて、生き方が決まる。「雑行を棄てて本願に帰す」。帰って行く言葉を「もとの阿弥陀のいのちに帰せよ」（「安心決定抄」）

第2組聞法会報告
新田先生の法話を聞いて
細川克彦（佛足寺）

2018年７月12日（木）午後2時から浪速区の唯専寺（木津御坊）で、第2組聞法会が開催、組内の住職・寺族と門徒・推進員等27名が参加した。講師は新田修巳先生（平野区正業寺）で、「仏法を伝えるということ」について、自らの体験を通して丁寧にお話を聞かせていただいた。（事務局）

先生は38歳の時、本山の伝道講習会に参加され、終盤に「教えとの出会い」と言うテーマで発表されたが、それを聞かれた先生から「大海原に船に乗って出て、長いロープに錨をつけて下ろしても、いつまでたっても底につかない」というたとえ話をされた。

「蓮如上人御一代記聞書」の「心得たと思うは心得ぬなり。心得ぬと思うは、心得たるなり。弥陀の御たすけあるべきことのとうとさよと思うが、心得たるなり。少しも、心得たると思うことは、あるまじきことなり」を引かれ、仏法を分かったということは、自分の知的な判断の領域でそう思っているに過ぎない。自分の邪見憍慢の心が見えず、分かろうとすれば何でもわかるという傲慢な意識に気づいていない。それは少しも頭が下がっていない。聞いても聞いても分からない自分であったという深い痛みに立つ。そこに立ち帰らしてもらうことが聞法の原点であると。（中略）

仏法を聞いて心が豊かになるのではない。仏法からほど遠い自分自身をその都度知らせてもらうのに尽きるのではないか。また、私たち一人ひとりはどんな物語を作っているのだろうか。私たちは法蔵菩薩の物語をいただいているということが如何に有り難いか。心の深いところに法蔵菩薩を認識する。知性と分別を頼りとするのではなく、法蔵菩薩を主体とする生き方をこそしていく。そこに聞法の大きな喜びもあり、生きる意欲につながると話された。

（細川氏のご報告が紙面の関係で、要約させていただいた。感謝と共にお詫びである。）